

3 検出遺構

(1) 調査前の地形と基本層序

調査開始前の状況 調査開始前における調査区の様相は、1979年までの発掘調査成果にもとづく整備で、食堂の基壇位置に凝灰岩製の縁石を置き、その内部に盛土をし、多数の樹木が植えられていた。

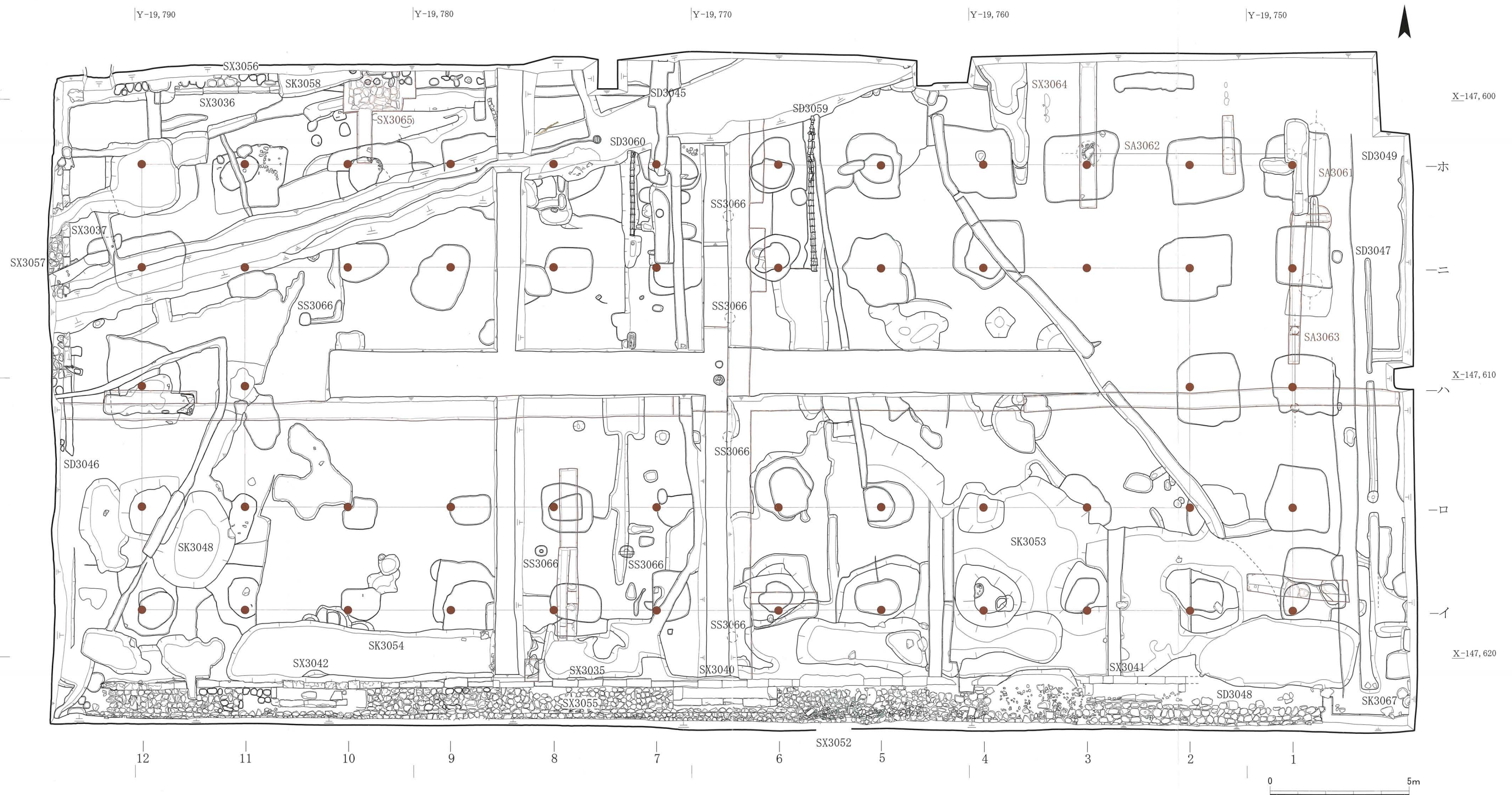
それ以前の食堂周辺の状況は、山田法胤管主によると、食堂基壇内を南北に貫く寺内通路が走り、通路を境に東半は水田および耕作地、西半は耕作地や雑木林で、北東から南西に向かって流れる水路とそれに沿う里道が設けられていたという。今回の調査区内においてもこれらを確認した。

基本層序 調査区内は1979年以後の整備のため、15～30cmの厚さで盛土が施され、これを除去すると旧表土が露出する。旧表土は、調査区中央部と東西端部とで異なり、中央部は南北通路の路面である。一方、東西端部は既往の調査区と一部重複するが、旧表土が残存する部分は基本的に耕土、もしくは腐植土となる。旧表土の厚さは20～50cmである。

これらを除去したうえで食堂基壇土を検出した。厚さは10～80cm。今回の調査の主な遺構検出面はこの基壇土上面である。一方、食堂造営前の遺構は、基壇土の下の整地土上面で確認した。整地土は、黄褐色粘質土や褐灰砂質土で、厚さは5～30cm、上面の標高は約59.80mである。この整地土は調査区内全体に広がっており、少量ながら瓦を含む。このことから、すでに周囲では瓦が搬入されるような堂塔の建設工事がおこなわれており、薬師寺の整備が進んでいたことが分かる。地山は黒褐色粘土層で、木片などの有機物を含む池沼状の堆積層である。地山上面の標高は調査区西端では59.70m、東端では59.40mである。調査区東部や南辺部では、これを切り込む自然流路を確認し、その中には埴輪片や古墳時代の土器片を含んでいる。



第4図 調査区全景（北から）



第5図 遺構平面図(1:150) ※柱位置は桁行中央間15尺、身舎梁行14.5尺、他はすべて12.5尺としたときの案

(2) 食堂に関わる遺構

食堂SB3050は桁行11間、梁行4間の東西棟礎石建物である。礎石の据え付け、あるいは抜き取りに伴う遺構を主に基壇土上で検出し、基壇外装として地覆石や地覆石抜取溝、階段の地覆石等を検出した。また、基壇南・西・北辺では石敷、南辺では石敷の外側に石組雨落溝を検出した。

A. 基壇とその築成

食堂基壇を現地表面下30～80cmで検出した。南辺が大土坑SK3053・3054に、東辺および北辺も後世の耕作等により大きく削平されている。基壇は最も残りのよい中央部で、整地土上面から約80cm残存しており、標高は60.50cmである。基壇の平面規模は、基壇外装である地覆石や地覆石抜取溝の外側間で、東西が約47.1m、南北が21.6m。薬師寺の造営尺である1尺=29.6cm(『薬師寺報告』)を適用すると、東西159.1尺、南北73.0尺となる。

基壇築成は、整地土面に版築工法をもちいて基壇を築成する。整地および整地土上の版築数層は基壇周辺の石敷下までおよぶ。そのため、調査区南端、西端では掘込地業の有無は確認できない。しかし、後述するように北端では整地土面に設けられた食堂造営前の石列SX3064、石敷SX3065が版築の下で残存しており、少なくとも北側に関しては基壇築成にともなう掘込地業はないとみてよい。一方、東端は地覆石抜取溝SD3047を境に、版築が西と東に向けて傾斜しており、それぞれ、食堂と東僧房に関わる掘込地業と考えることも可能である。このように明確な掘込地業とはいえないまでも、版築縁辺部の一部は緩やかに掘り下げたのち、版築をおこなっている可能性がある。

版築は、1層が3～20cmの厚さをもち、残りのよいところで10層程度を確認した。基壇中心部では細かく、縁辺部にいくにつれ粗くなる。しかし、いくつかの層は広範囲でほぼ水平に施されているので、一定の単位で高さを揃えながら、水平に基壇を築成したと考えられる。ただしいずれの層も堅



第6図 食堂基壇西半の版築層(南東から)



第7図 西階段SX3042(南東から)

固なものでなく、やや軟弱な印象をうける。版築土には、黄褐色砂や、灰白色粘質土、淡黄砂質土などからなり、なかには凝灰岩を粉砕したものを混ぜ込んだ凝灰岩層と称すべき層もあった。また、基壇東部では、版築の中に瓦を面的に敷き込んでいるところがある一方、西部では炭層が広がるところも確認した。

B. 基壇外装と階段

基壇外装 基壇の南面、北面西部、西面中央部で地覆石SX3035～3037を検出した。地覆石は、後述する2石をのぞいてすべて二上山産溶結凝灰岩製である。また、基壇北面中央付近、西面南半、東面では、地覆石の抜取溝SD3045～3047を検出した。地覆石は、全体的に風化しているもののおよそ当初の面を残している。大きさは長辺65～125cm、短辺18～35cm、厚さ8～18cmとばらつきがあるが、上面および基壇外面を揃えて据えられている。羽目石を設置するための仕口等は設けられていない。地覆石上面の標高は、基壇南面の西側で60.15m、東側では59.97mと東に向かって傾斜している。

地覆石は基壇から外周部にかけて整地・版築をした上に、据付掘方を掘って据えられている。また、地覆石を据える際、下に瓦等を入れて高さを調整しているところもある。地覆石据付痕跡は基本的には1時期分しかなく、据付掘方の埋土が精良で炭化物等の異物が混じらないことから創建期のものと考えられる。また、再建にともなう大規模な改装の痕跡なども確認できなかった。ただし、基壇南面で2石のみ春日山地獄谷産凝灰岩製の地覆石があり、これに関しては厚さ5cmと薄く、据え替えとみえられる。なお、羽目石や葛石など、地覆石より上部の基壇外装を原位置で残すものはなかったものの、基壇南面と北面で地覆石の前面に風蝕した凝灰岩片が散乱している箇所があった。凝灰岩は風蝕により原型をとどめていないため、断定はできないが、転倒した羽目石の可能性が考えられる。

階 段 基壇南面で3ヶ所の階段、中央階段SX3040、東階段SX3041、西階段SX3042を確認した。食堂



第8図 基壇西面地覆石SX3037と石敷SX3057（北から）



第9図 基壇北面地覆石SX3036と石敷SX3056（西から）

の桁行の中央間および東西両端からそれぞれ2間目に相当する位置にある。SX3040は第62-14次調査でも検出されている。いずれも二上山産凝灰岩製で、基壇地覆石を引き通したうえで、コの字状に凝灰岩製地覆石を突出させている。幅は東西約3.7m (12.5尺)、基壇地覆石外面から階段地覆石外面までの突出は約75cmである。SX3041は地覆石の上で風化した凝灰岩が覆っており、踏石の一部が移動しつつ残存したものと考えられる。SX3042では、東側の耳石地覆石が抜き取られていたが、階段地覆石と引き通した基壇地覆石との間にも凝灰岩が据えられていた。なお基壇北面でも階段が想定されるが、後世の水路開削等を受けてその痕跡は確認できなかった。

『薬師寺報告』では、SX3040の出が75cmであることから、踏面25cmで、3段の階段と推定している。また、基壇の高さを、蹴上と踏面とが等しいとした場合、地覆石の見付高10cmを加えて約85cmに復元している。後述するが、礎石はまったく残存しておらず、基壇の正確な高さは不明である。しかし、基壇土の最上面の標高が60.50mであること、根石の標高が60.10～60.20mから推測すれば、基壇の高さは少なくとも階段の出と同じ75cmあったと考えても齟齬はない。

C. 基壇周辺

石敷 基壇南面、北面、西面で基壇地覆石の外側に沿って石敷SX3055～3057を検出した。南面石敷SX3055の遺存状態はよいが、北面石敷SX3056および西面石敷SX3057は後世の削平のため、ほとんどの石が抜き取られ、石敷が部分的に残るほかは石の抜取穴が確認できるのみである。SX3055は、15～30cmの花崗岩・チャート・片麻岩・安山岩などの石材を基壇地覆石と雨落溝の間に3・4列敷き並べる。地覆石外面から雨落溝北側石内側までの幅は東側で約95cm、西側では100cmで、わずかではあるが西方で広くなる。地覆石上面と地覆石外面に接する石敷との比高は3～10cm。また、SX3055は北端と南端で、4～8cmの高低差があり、雨落溝に向かって緩やかに傾斜する。SX3056、SX3057



第10図 北面基壇縁（西から）



第11図 基壇南面雨落溝SD3048（東から）

は石敷の一部を検出したのみだが、石の大きさが30～40cmとSX3055よりも若干大きい。

雨落溝 基壇南面で石組雨落溝SD3048を検出した。SD3048は階段と地覆石の外側に沿って構築されている。石材には花崗岩、チャート、片麻岩、安山岩などがもちいられていた。後世に一部壊されているものの、遺存状態はよく、約40mにわたって確認した。15～45cmの石を底石として2・3列敷き並べ、その両端に20～40cmのやや扁平な石を立てて側石とする。側石上面と底石との比高は4～9cm。東端部で両端の側石を検出しており、溝幅は、側石の内々で約50cm。溝底上面の標高は西端で60.00m、東端で59.85mであり、基壇外装の地覆石と同様に、西から東に向かってわずかに傾斜する。また、東階段SX3041の正面では、SD3048内に30～50cm大の河原石が階段とほぼ同幅で置かれていた。おおむね上面が水平になるよう置かれていたが、いくつかは転倒していると思われるものもあった。これらは、階段前の雨落溝の溝幅を狭めるために意図的に置かれたものと考えられる。なお、雨落溝の埋土は灰色の粗砂であり、これが後述する石敷上面を覆っている。さらにその上にはごく薄くだが、焼土や炭をともなう赤褐色粗砂で覆われていた。

また、基壇東面で雨落溝SD3049の西肩のみを検出した。SD3049は隣接する東僧房の西雨落溝と共有し、第62-3次調査でも検出している。SD3048と同じく石組と考えられるが、石自体は抜き取られていた。また第88-23次調査では、西面や北面の西端部分でも石組雨落溝を確認しているが、今回の調査では雨落溝直上に埋設管等が通るため、検出できなかった。

D. 礎石の据付け

壺地業 廂柱と東西両妻の身舎柱では、礎石を据え付けるに際し、壺地業をおこなっている。掘方は、辺2.0～2.8mの隅丸方形で、深さは0.4～0.5m。掘方には、粗砂と粘質土、また部分的に瓦片を入れながら層状に埋め固めている。壺地業の掘方の掘り込み面は確認できる場所は限られるものの、基壇



第12図 調査区東部壺地業検出状況（南から）

版築の途中から掘り込み、礎石を据えた後、さらに基壇を積み足している。また、根石を据え付ける際に、掘り込んでいられるものもある。なお、壺地業のなかに含まれる瓦は大半が平瓦だが、なかには軒瓦もあり、すべて奈良時代前半の薬師寺創建瓦である。

礎石据付掘方 東西両妻の身舎柱を除く身舎柱位置では、原則的に壺地業はおこなっておらず、かわりに礎石据付掘方を検出した。礎石据付掘方の大きさは、1.7～2.4mの円形から隅丸方形である。礎石据付掘方は、基壇上面から掘り込んでいる可能性がある。根石がない礎石据付掘方の深さは、遺存する基壇上面から10～30cmと浅い。一方、根石をもつものでは40～50cmと深い傾向にある。掘方の埋土は基壇土由来の土とみられ、層状の埋土などの明確な地業の痕跡は認められない。

礎石抜取穴 礎石はすべて抜き取られ、調査区内には破片も残存していない。しかし、基壇が比較的良好に残っている中央部から西部にかけて、礎石抜取穴を検出した。大きさは1.0～2.5mで、深さは10～40cmである。一部は後述する基壇南辺の大土坑SK3054によって壊されている。

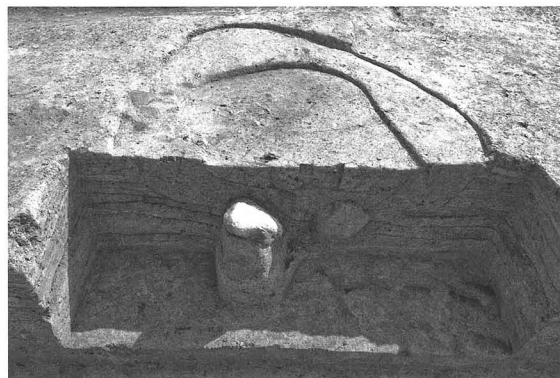
E. その他の遺構

足場SS3066 基壇上面で検出した、径約30cm、検出面からの深さ約40cmの柱穴である。これらは壺地業や礎石据付掘方の間に筋を揃えて並び、足場の遺構と考えられる。柱穴は食堂の遺構と重複しないため、いつの時期の足場かは断定できないが、埋土が淡黄色砂質土で基壇土由来の比較的精良な埋土であり、また瓦などの遺物を含まないことから、食堂創建時の足場と思われる。

瓦溜まりSX3052 南面中央階段SX3040と東階段SX3041の間で、雨落溝や石敷の上から、完形に近い軒瓦や丸・平瓦がまとまって出土した。これらは東西約8mにわたり折り重なって出土しており、屋根根から落下した瓦の可能性が高い。軒丸瓦は薬師寺39型式、軒平瓦は薬師寺245・254型式でいずれも平安時代中期のものである。再建時の食堂の屋根に葺かれていた瓦と考えられる。



第13図 壺地業ホ6 (西から)



第14図 礎石据付掘方ニ6 (西から)



第15図 壺地業ハ1 (南から)



第16図 瓦溜まりSX3052 (北から)

F. 建物の規模

食堂の規模は『薬師寺報告』では、桁行11間、梁行4間で、柱間寸法は、桁行は中央間を15尺、それ以外は12.5尺等間とし、総長を140尺、梁行は身舎2間を14.5尺、廂12.5尺として総長54尺に復元しており、『縁起』（長14丈、広5丈4尺5寸）とほぼ一致するとしていた。

今回の調査により建物の柱間数は、桁行11間、梁行4間と確定したが、礎石が1石も遺存せず、礎石抜取穴や壺地業の掘方の規模も大きいため、正確な建物規模の確定は困難である。ただし、基壇の規模、南面の階段、礎石抜取穴、雨落溝など今回検出した遺構からいくつか手がかりはある。

まず、基壇の規模は、地覆石や地覆石の抜取溝外側間から、東西47.1m（159.1尺）、南北21.6m（73.0尺）と確定した（1尺=0.296m：『薬師寺報告』）。ただし、南面中央階段から得られる南北中軸線から東は23.3m、西は23.8mと西の方が50cm程度広い。次に、基壇南面で検出した3ヶ所の階段の幅は、耳石地覆石外側間でいずれも3.7m（12.5尺）を測る。東階段の耳石地覆石東縁から西階段の耳石地覆石西縁までの距離は33.0m（111.6尺）で、中央階段は正しくこの中央に位置する。また、今回の調査では南面の石組雨落溝と東面の雨落溝抜取の西端を検出したが、北雨落溝と西雨落溝は既往の調査で確認している。南北雨落溝心心間の距離は、23.9m（80.7尺）、東西雨落溝心心間の距離は、東雨落溝の遺構が明確でないため、南北中軸線より西雨落溝心までの距離25.1mを折り返し、東西を50.2m（170尺）に復元する。以上が遺構から得られた食堂の規模に関する情報である。

この中で、特に注目できるのは階段である。先述したように、東西階段の耳石地覆石外縁間の距離は33.0m（111.6尺）である。南面階段は東西両妻からそれぞれ2間目にあり、この間に9間分の柱が配される。33.0mを9間で割ると1間は3.7mとなり、階段の幅（3.7m）にほぼ一致する。したがって、検出遺構からは身舎桁行9間が3.7m（12.5尺）等間である可能性が指摘できる。廂の柱間寸法に関しては、遺構から明確な根拠はなく、ひとまず12.5尺とし検討してみよう。この場合、食堂の桁行全長は3.7m（12.5尺）等間で40.7m（137.5尺）となる。このとき、基壇の出は、南北中軸線から折り返した場合、東は3.0m（10尺）、西は3.5m（11.8尺）となり、西側柱から西雨落溝心までの距離（軒の出）は、4.8m（16.1尺）と算出される。この軒の出の数値を梁行方向にも適用すると、建物の梁行総長は14.3m（48.3尺）となり、身舎梁行2間が3.5m（11.8尺）と算出される。しかし、この身舎梁行の柱間寸法では、梁行方向の礎石抜取穴の位置とは合致せず、遺構と齟齬が生じてしまう。礎石抜取穴からみても、身舎梁行は最低3.8m（13尺）必要である。

一方、『薬師寺報告』の復元案をもとにすると、西面の軒の出は4.4m（14.9尺）、南北の軒の出は4.0m（13.3尺）となる。この場合、桁行、梁行方向で雨落溝までの距離は40cmほど異なるが、雨落溝の内々の幅50cmには収まる。したがって、梁行の柱間はひとまず学報に倣い身舎14.5尺、廂12.5尺と考えておきたい。

以上から、『薬師寺報告』の復元案のほうが、雨落溝の位置から考えられる案や『縁起』とも大きな矛盾はない（復元案A）。ただし、階段幅と桁行中央間の柱間寸法が合わず、このための東西の階段も柱間と合わないなど問題が生じる。桁行を階段に合わせ12.5尺等間とし、梁行の柱間寸法は仮に『薬師寺報告』に倣うとすれば（復元案B）、東西と南北とでは雨落溝から廂柱までの距離が異なってくる。この場合、雨落溝から廂柱までの距離が平側よりも長い妻側では、石敷に雨水が落ちると想定せざるを得ない。このようにいずれの柱配置も遺構とは完全に整合しない。今後、東西僧房や十字廊の取り合い等も含め再度検討する必要がある。

(3) 食堂造営前の遺構

掘立柱列SX3061～3063 調査区東北部で食堂造営以前のほぼ正方位にのる柱列を3条検出した。これらは基壇版築の下層にある。東西掘立柱列SX3062は瓦を含む整地土上面から掘り込まれ、壺地業に壊されている。柱掘方は約0.6m、整地土上面からの深さは0.3mで、少なくとも3間以上あると思われる。柱間は2.1m（7尺）である。

SX3061はSX3062から0.6m東にある、南北掘立柱列である。整地土上面から掘り込まれ、壺地業に壊される。柱掘方は約1.2～1.4m、整地土上面からの深さは約0.2～0.4m。2間分確認し、柱間は2.4m（8尺）。SX3061のうち1基のみ、基壇土が削平され、整地土が露出する面で平面を確認した。

SX3063はSX3061の南0.5mに隣接する南北掘立柱列。柱掘方は約0.5m、整地土上面からの深さは0.3m。1間分検出し、柱間は2.4m（8尺）である。なお、これらの掘立柱列は、建物や塀になる可能性もあるが、部分的に確認できたのみで詳細は不明である。

石敷SX3065 調査区西北の北面基壇縁で確認した石敷。食堂北側柱西端より4つ目の柱位置の北方にあたる。東西1.6m、南北1.3mで、北辺は調査区外まで延びる。西と東、南の3辺に見切石を並べ、その中に約40cmの大きさの玉石を並べる。南辺の見切り石は東西のものに比べて大きい。石敷の南側は食堂基壇内部にまでおよび、基壇版築で覆われている。瓦を含む整地土を掘り込んで据えられているため、薬師寺に関する遺構と考えられるが、その性格や食堂との関連は不明である。

石列SX3064 基壇東北隅から西へ12mの地点で確認した石列。南北方向に石が3石並ぶ。基壇縁より内側にあり、基壇版築土で覆われている。長さは約1m。石敷SX3065の東約24mの位置にあり、食堂基壇の中軸で折り返すとSX3065とほぼ相対する。このためSX3065と同じ性格をもつ一連の遺構の可能性もあるが、やや南に位置する。



第17図 石敷SX3065（北西から）

(4) 食堂廃絶後の遺構

大土坑SK3053 基壇南部を破壊する大土坑。大きさは東西約22m、南北約9mと東西に長い。南面の地覆石を一部破壊するが、地覆石を土坑の南辺として掘り込んだ様相が看取できる。深さは、残存基壇の上面から最も深い所で約50cmある。SK3053は、食堂SB3050の南側柱筋や入側柱筋の礎石位置にもおよび、側柱筋に施された壺地業が島状に突出する。奈良時代から鎌倉時代にかけての膨大な量の瓦や、8世紀末から13世紀にかけての土師器や瓦器椀、土師皿などが出土した。

大土坑SK3054 SK3053と同じく、基壇南辺を破壊する大土坑である。基壇南辺の地覆石を残し、土坑南辺の肩として利用していたらしい。東西約14.4m、南北約2.1mと東西に長い溝状を呈し、基壇上面からの深さ約0.8m。食堂SB3050の南側の側柱の礎石抜取穴を壊している。出土した瓦の量は、SK3053よりも若干少ないものの、SK3054の東辺部では、大量の凝灰岩片が捨て込まれていた。SK3053と同様の性格の遺構だろう。

土坑SK3048 SK3054西端の約2m北で検出した。直径2.1～3.5mの不整形な円形で、深さは基壇の上面から1.0m。埋土に大量の瓦を含む。最下部で13世紀の完形の瓦器椀が1点出土した。

土坑SK3058 調査区西北隅から8m東で検出した。石敷SX3065の西端を破壊する。東西は3.1m、深さは1m以上。南端の一部分のみ検出し、大半は北側の調査区外に広がる。埋土は暗灰色粘土で、最下部に木材を敷く。東端には平瓦を立てて筒状にした桯が設けられていた。近世の水溜めであろう。

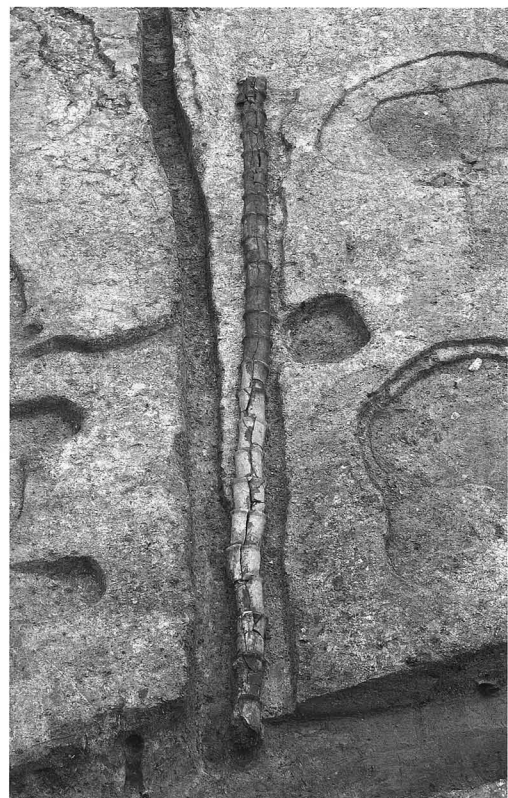
土管暗渠SK3059・3060 調査区中央の北寄りで南北方向の瓦製の土管暗渠を2条検出した。いずれも暗渠の両端が壊されているが、北に向けて緩やかに傾斜することから、南から北へ排水していたことがわかる。土管は片側にソケットをもち、近世のものとみられる。SK3059は、土管が24基残存しており、長さ5.5m分を検出した。一方、SK3060は13基残存しており、長さ3.0m分を検出した。



第18図 大土坑SK3053の瓦堆積状況（南から）



第19図 大土坑SK3053（南東から）



第20図 瓦暗渠SD3059（北から）